

日韓の次世代に残された歴史問題

石川 七海

【要旨】

現在、日韓関係は史上最悪と言われているが、韓国好きの友人が多い筆者はこれに違和感を覚える。友人たちは、K-POPをきっかけとして韓国に親近感を覚えた者が多い。この世間(世論)と私達との温度差はなぜ生まれるのか。本稿では、世代間で対韓イメージは異なっているのではないかと仮定するとともに、その要因はどこからくるものなのかについての分析を試みた。そして、その原因のひとつは、テレビ世代とインターネット世代との差にあるのではないかと結論に行きついた。

K-POPの世界的流行は、韓国政府の支援によるところも大きい。K-POPと韓流人気は、韓国のイメージアップに貢献するとともに、韓国の文化を対外商品として世界中に定着させるまでに至ったのである。こうした国境を越えた文化産業の影響は韓国企業にまで及び、多額の投資と支援が行われている。また、観光やコスメなど他の分野の商品を海外に広める役割を果たしている。

【講評】

本論文は、一般に「陰悪」と報道されている現在の日韓関係について、自身の経験・周囲においては「良好」とされるギャップをきっかけに、調査考察を行っている。教科書を初めとする歴史教育・歴史認識の違い、テレビや雑誌、ウェブメディア、ソーシャルメディアにおける報道の仕方について調査し、メディアリテラシーの重要性を指摘している。また、「韓流」に対して、韓国では「日流ブーム」があり、日韓の若者層は既に互いの文化を受け入れていることを明らかにしている。本論文の最後で、韓国文化を「ただ単に消費する」傾向にある日本の若者に対して「きちんと歴史に向き合うことを目指すためにも、もっと政治に興味を持つべきだ」と主張しているのは高く評価できよう。